

【浜松市会場】

1. 開催日時・会場

- ・ 日時 平成14年11月24日(日)13:30～15:50
- ・ 会場 浜松市地域情報センター ホール

2. 出演者構成

- ・ コーディネーター
上野 征洋(静岡文化芸術大学)
- ・ 地域づくり代表者
大和田 清隆(浜松市在住)
金森 武夫(浜松市在住)
川合 康一(天竜市在住)
長谷 守保(浜松市在住)
見野 孝子(浜松市在住)
三宅 淳子(浜松市在住)
山内 秀彦(掛川市在住)
山口 祐子(浜松市在住)
- ・ 行政職員
水谷 明大(中部地方整備局建政部都市調整官)
武田 一寧(中部運輸局企画振興部企画課長)
岩田 良明(静岡県土木部建設政策室長)
木村 忠幸(静岡県都市住宅部都市政策室長)
- ・ 聴講者
計60名(男性53名、女性7名)
- ・ 会場風景

3. 会議録

司会 このたび、中部地方の目指すべき方向として、まんなかビジョンの中間取りまとめをしています。その一環として、まんなかビジョン討論会を中部地方の8地区で催しており、浜松地区が6カ所目に当たります。本日の討論会を、地域の実状を踏まえた実りある会にしたいと思います。

それでは、ビジョン討論会に先立ち、主催者側を代表して中部地方整備局の水谷都市調整官よりご挨拶をいたします。

水谷 水谷です。まんなかビジョンは、国土交通省の施策の方向づけとなるもので、現在中間取りまとめの段階です。地域の皆様の意見を伺いながら、最終取りまとめを行きたいと思っています。メンバーの皆さんは、静岡県西部地域の地域づくりでご活躍されている方々です。事務局側からは、国土交通省2名、静岡県2名が参加しております。

21世紀に向けて豊かな地域づくり、生き生きとした暮らしを実現していくためには、厳しい社会経済情勢の中、色々な施策を効果的、効率的に進める必要があります。そのため、地域全体で共有できる地域づくりの目標策定を課題として、まんなかビジョンに取り組んでいます。

本日のまんなかビジョン討論会は、日本の真ん中にある中部地方の将来の地域づくりについて、どのような目標を持つべきか、色々な観点から検討していただきます。よろしくお願いいたします。

司会 ここからの進行は、静岡文化芸術大学の上野先生にコーディネーターをお願いいたします。

上野 私は、2年半前に開学した静岡文化芸術大学の文化政策学部にも所属しています。浜松及び県西部地域は、まだまだ発展途上であり、また、近々には浜松市を中心に周辺市町村との合併による政令市を目指す動きもあります。そうした中で、中部地方全体をどう考えるかというのがまんなかビジョンの趣旨であり、10年、20年先を視野にまちづくりを考えようというのが、まんなかビジョンの目指すところです。今朝のニュースには、補正予算で1兆5,000億が新たに地域整備を中心に投入されるとありました。そうしたことを背景に、私達の生活の基盤である浜松並びに県西部地域は一体どういう地域であれば良いのか、そして、市民の人達が安心・安全に暮らしていくためにはどんなまちづくりや行政と市民の協力が必要なのか。そうしたことを、今日は意見交換しながら進めたいと思います。それでは、順番に自己紹介をお願いいたします。

木村 静岡県都市政策室の木村です。まちづくりに関する仕事をしています。静岡県は、東海地震の危険性が叫ばれているので、安全で安心で住む人が幸せを感じるような地域ができれば良いと考えています。その意味では、浜松市は全国でもトップクラスであり、区画整理や鉄道高架等の事業によって大きな都市改造を行ない、まさに都市再生をすでに実践していると強く感じています。

会場の皆さんを見ますと、まさに「やらまいか精神」の固まりのような方ばかりだと感じますので、今日は積極的なご提言、ご発言がいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

岩田 静岡県土木部建設政策室の岩田です。高齢化社会によって、活力が失われてしまうかもしれない。誰もがまちの中で活動し、また住みやすいまちにしていかなければいけないので、土木

部としても一生懸命取り組みたいと思っています。よろしくお願いします。

山口 浜松 NPO ネットワークセンター代表の山口です。私達は、こうなったら良いなという思いを繋ぎ社会的な力に育てることを目的に 5 年前に設立された民設民営の、草の根の市民団体を支え育てる組織です。今日は、市民参加によって何がどう変わるかという方法論についてお話を申し上げられたらと思っています。

山内 掛川市の山内です。私は、この地域の住民が、自信を持って暮らせる地域が実現できたら良いと思っています。さらに、誇りを持てる郷土をどうやって作るかについてみんなで話し合い、取り組んでいくことを是非実践して行きたいと考えています。

三宅 浜松市内の曳馬の三宅です。市民活動浜松まちづくり 101 人会の副代表を務めています。101 人会を設立した目的は、浜松市の市民が大人も子供も生き生きと輝く、人が主役になって地域づくりができるような、そんなまちになることです。

見野 浜松駅東南の芳川の見野です。ライフケア浜松で介護事業に 17、8 年携わっています。浜松市が高齢者や子供や障害を持った方々にも優しいまち、そして、環境にも優しいまちであってほしいと願っています。

長谷 浜松市高丘町の長谷守保です。建築設計事務所をやっており、建築士会浜松支部のまちづくり委員長を務めています。次の時代に何が残せるのか、また何が生み出せるのかということを一人一人が自覚的に考えて生きていけるようになれば良いと思います。

川合 天竜市の山奥から来ました川合です。私の出身地の熊には、村おこしで水車の里という所があります。そこでは、一生懸命頑張っているが、空き家が転々と増えてきてしまい、非常に寂しい思いをしています。そういうことの無い地域づくり、村おこしができたらと考えています。

金森 浜松在住の金森です。私どもは、大久保の方に工業団地を作るなどして、産業面で国際競争に勝つことが最重要であり、日常あまり町中を歩かないため、まちづくりに接する機会が少ないので勉強したいと思います。

大和田 浜松まちづくりセンターに勤務する大和田です。市民と行政の中間的な立場として、地域を良くするために活動している人達の支援事業をしています。

水谷 中部地方整備局都市調整官の水谷です。地域のまちづくり、都市計画等の地域計画を担当しています。私は、地域が活力や魅力に満ちた、楽しい地域になると良いと思います。

武田 中部運輸局企画振興部の武田です。交通行政に関わる中で、最近はコミュニティーバスや路線バスが廃止されており、高齢化社会を迎えるに当たって解決しなければならない問題が増えています。そうしたことを背景に、まちづくりの観点を踏まえた地域密着型の行政が必要になっており、中部整備局や他省庁、もしくは県市町村と共同でこうしたまちづくりの場にも積極的に

参加しようということで、意識改革と組織改革を本年度より進めています。よろしくお願いします。

上野 ありがとうございます。この後、討論者の皆さんからご発言をいただきます。ご発言の後に、まんなかビジョンについての説明を受けてから、会場にご出席の皆様目標の重要性に関するアンケートをさせていただきます。

山口 私達は、市民活動団体を支える市民活動団体です。皆さんの今日のご挨拶を伺うと、大体皆さん同じようなことを考えていらっしゃる。それをどう実現するかという、方法論において革新的な方法を取り入れなければ日本は変わらないのではないかと考えます。

私達は、「エヌポケット」と言って、高齢者、障害者、子供達、在住外国人等、マイノリティーと言われる人達の自立を支援する色々な事業を行っています。その事業に参加する一般市民が、自らの課題を解決できるような自立した市民に成長するように支援することが、私達の目的です。そして、様々な事業を展開する中で、行政との共同事業にここ2年間関わってきました。例えば、商工労働部の知的障害者の就労支援事業である、安間川河川整備構想策定事業。これは、一般の企業に就職できるようなサポーターを養成して、知的障害者を企業に送り出そうという事業です。それから、障害者のためのパソコンセンター、マルチメディア情報センターの企画運営事業、また、独自の多文化共生事業を行っています。

様々な事業を進める中で、日本は、戦後50年、ほとんどの仕組みが変わらなかったのではないかと感じています。日本は、その仕組み、制度、サービスメニューを含めて、すべてが自己完結型になっています。それぞれは非常にディテール細かく優れたものであるにもかかわらず、行政の方たちと一緒に仕事をする時になかなかスムーズに連携ができない。それを解決するために、規制緩和の必要性が言われるのかもしれませんが、そのことさえ解決できれば日本は非常に素晴らしい国になるのではないかと考えています。

私達のような自立した法人格を持つNPOが専門性を持てば、バラバラの行政組織を横に繋げていくことができます。例えば、安間川の河川整備構想策定事業では、8カ月掛けて市民原案を作りました。最初は、土木事務所だけしか関わらなかったのですが、それでは水全体のことが分からないということで、河川課や土木管理課や下水道課や公園建設課等、様々な方たちが自発的に関わるようになり、その後、自治会や議会の方も関わって最終的に市民原案が誕生しました。縦割りの組織が、一つのプラットフォームに乗ることによって情報が共有され、市民も大変育てられました。行政も変化するし、私達自身も成長する。今まで縦割りで連携しなかった人達が、情報を共有し、現場を共有することによって、すべての人達が様々な体験しつつ学び、変化して行きます。例えば、2年目になるジョブコーチ事業でも、同様のことが言えます。全県下6カ所に設立された就労支援グループでは、MMセンターの運営も障害者団体の人達に企画委員会に入っただけ、様々な分野の人達が連携して仕事をしてきました。そして、それが大変有効であることが分かりました。

向かうべき方向は、ほぼ見えていると思います。このビジョンに計画される様なことも、地域にいらっしゃる多分野の方たちが専門的なものを持ち寄って計画に関わり、相互に信頼することによって、具体的に動き出すのではないかと考えています。

上野 ありがとうございます。縦割りを越えて横に繋いで市民の力を生かせるネットワークづ

くりが重要という主旨でお話いただきました。

山内 私は、まちづくりのコンサルタントとして、地域の区画整理のコーディネーターを務めたり、住民参加の中でのコーディネーター役を担うことが多く、最近では静岡空港周辺の地域づくりにも携わっています。また、NPOの活動や浜松商工会議所青年部のメンバーとしての活動等、様々な立場で色々な活動をする中で、右肩上がりの発想はやめよう、身の丈に合ったまちづくり、地域づくりを進めるべきだと考えています。即ち、掛川で進めているスローライフという考え方に基づいたまちづくり、また、コンパクトシティや循環型社会というように、ゆっくりではあるが足元を見ながら着実に進める方が良いのではないかと感じています。但し、地域として生きていくためには成長も必要であり、一方では、人間性回復の重視という両面を持ち合わせていかなければいけないと最近感じています。

そうした中で、まちづくりに必要なものは、コミュニティだと感じています。我々が関わっている事業において、住民との対話や合意形成を進める上で、最終的には人間の生活単位であるコミュニティが重要になってくると感じます。公共事業では、利権や利害に関わる事が多く、そのことで地域のコミュニティが崩壊、あるいは希薄になっているところが出てきています。それをどうやって育てていくかが、これからの課題と思っています。新しくできた町では、新たにイベントを起こすことも地域のコミュニティを作ることに繋がるであろうし、イベントを進める中で色々な世代の人達が集まり新しいコミュニティが出来て行く。そういうことを合わせて進めなければ、単にハードの部分、あるいは公的な部分だけでは、解決できない部分があるのではないかと感じています。

最終的には、地域やまちづくりのことが好きな人をどれだけ育てるか、あるいは掘り起こすのが重要だと思います。強制的にではなく、やはり自主的にやらなければ本物には成っていかないと常日頃感じています。

上野 ありがとうございます。対話と合意形成のためには、コミュニティがとても大事だということ。まちを好きな人が大事というのは分かりますが、まちづくりの好きな人がたくさん集まれば、もっとまちそのものが好きな人を増やせるのではないかと思います。スローライフとかゆっくりとかコンパクトという話は良く分かりましたが、ちょっとやらまいか精神と反すると思いますが、如何ですか。

山内 やらまいか精神は、あれこれ考えずとにかくやってみよう、何でもかんでも飛びついて広めていくという考え方が、かつてはあったかもしれませんが、これからは、今までのオピニオンリーダーによる「やらまいか」ではなく、普通の人みんながみんなで考える前に一歩前に出ようという考え方に変わるべきではないかと感じています。

上野 ありがとうございます。三宅さんお願いします。

三宅 私も以前、環境共生住宅について話したときに、環境道楽とかまちづくり道楽が増えると良いという話をしました。やはり同じ様なことで、皆さんそれぞれ活動されているのだと思いました。

101人会は、静岡文化芸術大学が開学したことをきっかけに設立された会です。平成10年8月

に、日頃仕事を通じて異業種交流を図っていたメンバーで発足しました。3、4年前までは、まちづくりにおいて、行政や市民や事業者が共同でまちづくりをすることは無かったと思います。しかし、静岡文化芸大が地域に開かれた大学を目指すということを聞き、浜松市民として何か地域と大学を繋ぐ会が起こしたかったこと、そして共同のまちづくりを進めようと発足しました。

具体的には、浜松市かじまち通りのゆとりモール、トランジットモールの試行実験に参加したり、市の環境企画課と一緒に環境をテーマにしたイベントである浜松環境フェアを行っています。また、県事業では、東海道400年祭事業に携わっています。これは、各地域で活動している地域団体が、それぞれの個性を発揮しながら、東海道にまつわる色々なイベントを繰り広げるものです。それから毎年春には、文芸大の新入生に浜松市内にあるオブジェやアート、また、景観関係の賞を取っている場所等を紹介したウォッチングマップを配布しています。そうした活動を進める中で、今後ますますパートナーシップ型のまちづくりが主流になっていった場合には、まちづくりセンターのような、色々な活動を支援する施設が非常に重要な役割を担っていくのではないかと思います。

また、共同でまちづくりを進める中で、日頃、自治会や町内会等の地域コミュニティの人達との関係に難しさを感じます。一例を挙げると、ある町で公園を舞台にした景観づくりをみんなで考えていこうということで、市民グループと自治会が集まりましたが、話が合わずに進められませんでした。これからは、まちづくりの運営の場面で、地区の皆さんとの共同をどう図っていくかということが大きな課題になってくるのではないかと思います。

上野 ありがとうございます。コミュニティの原点である自治会や町内会の皆さんたちと、どうやって一緒に進めるかということがこれからの課題のようです。

見野 近年、浜松の町は急激に変わっています。先日も、建物が壊されており、それを見ていたお年寄りに跡はどうなるのか聞かれましたが、答えることが出来ませんでした。自分たちが住んでいながら、「まちを好きに」とか「まちを元気に」と言われても、目の前にある空間や環境を見ると、あまりよく分からないし、将来の姿が見えてこない。自分の住んでいる町が大きく変わる時に、どう変わるかも分からないようでは、市民に優しいという目標がきちんと出せるのか心配です。

例えば空き地になっている所には、道路工事現場のお詫びのイラストのように分かりやすい、将来イメージのイラストがあれば、将来の楽しみも増えてくると思います。そういう意味では、ビジョンにしても、分かりやすく、自分たちが住みたいと思えるような見せ方が欲しいと思います。ここに住んでいる人達が、ここはこれからこうなっていって楽しみなんだよとみんなが口々に言えるようなまちであって欲しいと思っています。

上野 ありがとうございます。やはりまちの将来が具体的に見えるのと見えないのとでは、全然取り組み方が変わると思います。県が将来構想を示す場合に、なかなか住民に分かってもらえないということはありませんか。

岩田 今のお話は、仰るとおりだと思います。広報では、PR用冊子の発行や完成イメージの掲示等を少しずつ始めています。しかし、完全には周知できていない状況にあると思います。非常に貴重なご意見ですので、これからは是非取り組んで行きたいと思っています。

上野 ありがとうございます。

長谷 私、まちづくりに携わっているのは、好きだからだけでなく、建築設計に関わる者として浜松の町が秩序無く作られているのを見て、我々の仕事は個別的なものだけを閉鎖的にデザインするのではなく、もっと社会のシステムからきちんとデザインするべきであると思ったからです。ひとりの建築士として、好きだからではなかなか続かない、やはりそれぞれの皆さんが持っているプロフェッション、使命感があると思います。また最近、建築士の中では、自分たちで研鑽を積み、それを社会にアピールするような制度を作ろうという風潮に変わってきており、その活動に建築士会としても関わっています。

それから、まちづくりという言葉は日本だけの概念ではないかと思います。高度経済成長時代の効率主義によってバラバラに縦割りされたものを、横に繋げることがまちづくりの概念だと考えます。横につなげるためには何が必要かということ、自分だけの立場でなく、色々なことに気づいたり関心を持つことが必要だと思います。しかし行政面や教育面で、それが妨げられることも多く、それを変えなければ本当のまちづくりも、未来に向かう明るい社会も作れないと思います。

建築士会のまちづくり委員会では、子供の視点に帰ろうということを言っています。大人の目から見ると当たり前のことも、子供の目から見るとすごくおかしいことがたくさんあります。ここから先はどこの管理など、知らないことでまちが分断されている。子供の視点からは、そんなあほらしいことはなく、「一緒にやればいいじゃん」というような見え方がしてくると思います。子供との関わりの中で、そういう視点にこちらも気づかされるのではないかと思います。

上野 ありがとうございます。仰るとおり、実際のまちづくりでは、色々とおかしなこともたくさんあります。子供の目でなく、大人の目から見ても結構おかしいことがたくさんありますので、そういうものをどうやって私達が理解していけば良いのか話し合いたいと思います。

川合 右肩上がりの高度成長期の時代、木材の需要がすごく活発で、そういう時代には天竜は非常に景気がよかったわけです。私は、林業とお茶の生産を行っていますが、景気が下降線をたどり始め、私どもの地域では、村おこし事業に取り組みました。発足当時、地域活性化推進協議会という会を立ち上げたときから、毎晩のようにどの様に女性の皆さんが希望する味噌づくりやそば打ち道場等の施設を作れば良いだろうかということを話し合いました。そして、地域の財産区の資金を使って進めようということになり、地域 306 戸全部が加入する組織を作りました。この会では、会員として資金を使うかわりに、利益が出たらそれを地域の皆さんに還元するという仕組みを作りました。今は、NPO になって 1 年になりますが、初めからいわゆる NPO 的な発想で地域活性化推進協議会ができました。

昭和 26 年には、人口が約 2,000 人余ありましたが、今はすでに 1,000 人を割ってしまいました。幼稚園の入園式や卒園式には、小学校も同じですが 7 人、8 人という子供がいたのが、今はたったの 2 人とか、一番ひどい時には入園児が 1 人というときがありました。そういう中でも、土日等になると水車の里には、多くのお客さんがいらっしゃいます。交通整理が必要なくらいに人が来てくれる。そういうことで、一生懸命やっているし利益も出ています。さらに、高齢者福祉として、お弁当を届けるということも NPO に変わってから展開しています。

しかし、皆さんが一生懸命取り組んでいる、やっていてくれるんだけど、空き家ができた

り人が減っていってしまう。これはどういうことなんだろうと、本当に私どもはつくづく考えさせられてしまいます。村おこし事業を始めた昭和63年当時から平成元年にかけて、この事業に非常にご助力いただいた当時の関東農政局長さんに実状をご連絡したら、それは大変残念なことだと次のようなお返事をいただきました。

村おこしを行うことで地域の住民が若者も子供も残り、そして人口も減らずに地域が活性化することが狙いだけでも、なかなかそこに到達しない。本当にどうしたら良いのだろうと、元局長さんも日頃考えておられる。そして、地域おこしを行うことと全く同じく、コミュニティが重要であるということでした。

上野 ありがとうございます。川合さんの問題提起は、都市部と中山間地域の調和ある発展とか村おこし等が、もっと町中に住む人達に理解され、そしてもっと交流を活発にすることがとても重要であるということだったと思います。

金森 色々な問題を考える中で、とにかく国家予算にしても税収が2兆円足りないとか、みんなお金が無い。個人と自営業の方は、かなりの資産をお持ちになっているが、土地等もほとんど資産価値が無くなっている。経済の状況が、今までとは全く変わったと思います。しかしその中で、繰り返されている議論は、今までの議論の延長です。

私の友人の話では、幼稚園の子供が3年前と比べると半分になっている。子供の数が2分の1ということは、将来の成長がどうなるかは、すぐに答えが出ます。一方、高齢者の人口は、増加しています。人口が減ることは、経済力において絶対的な要素です。まちづくりを考えるにあたっては、このことを良く考える必要があると思います。これまでは、立派な施設をたくさん作りましたが、それは過去のこととして、これからは私達の孫の世代に、日本がどうなるかをしっかりと考えて、まちづくりや都市計画を進める必要があります。銀行が破綻するなどということは、以前は想像できませんでした。

世界経済では、人口12億人を抱える中国やインドの台頭。アメリカのシリコンバレーも以前の勢いを失っている。経済の世界は、非常にスピードが速く、3年後、5年後には、おそらくびっくりするような時代になっていると思います。他にも、イラクや北朝鮮の問題、テロの問題など、様々な問題があります。

日本では、高速道路の建設問題について議論をしていますが、それ以前の問題について、私達は議論する必要があると思います。今日お集まりの皆さんは、もっと国の政治に対して声を大きくして欲しいと思います。

上野 ありがとうございます。今日のテーマはまんなかビジョン、地域づくり、まちづくりですが、それ以前に考えるべき重要な問題を提起いただきました。仰るとおり人口がどんどん減っており、このまま100年続くと6,000万人減るので、ちょうど日本の人口が半分になるという事態です。100年前の明治の終わり頃、日本の人口が6,000万でした。そして、人口が減るだけでなく、経済力をどうするんだというのが今のご指摘でした。

大和田 私は、まちづくりセンターに勤務しています。センターの活動の中でも重要視していることは、地域に関心を持つ人達を増やすことです。地域のことが好きで、活動の輪を拡大してまちづくりに積極的に出てくる人達は、放っておいても色々なことをやる人達だと思います。地域

活動を拡大したいという時には、どれだけ地域に関心を持つ人がいるかが重要です。人々に公的な場所や物や活動に関心を持ってもらうということが、多分その地域の力を高める大きな要因になると思っており、その拡大をセンターの役割として大きく位置づけています。具体的には、市民活動をしようとしている人達に、色々な活動を紹介したり、市民グループに入りたいのに躊躇している人達の背中をポンと押してあげるようなことをしています。

また、子供への教育も非常にウエイトを置いているテーマの一つです。具体的には、子供たちにまちづくりについて勉強してもらっています。子供たちには、地域や身の回りを良くするために行動することがまちづくりだと説明しています。だから、情報でも福祉でも、分野は何でもありで。いろんな分野がある。先生と子供達が一緒になって、ユニバーサルデザインや公園整備などのテーマを考えて1年間のプログラムを作ります。そしてプログラム作成にセンターがアドバイスし、スタッフの関わり方も位置づけ、1年を通して関与していきます。その中で、子供達の発見などをどのように育てていくか、今色々工夫をしながら進めているところです。

先日、西小学校の6年生が全員来ました。提案までさせるようにすることが大変ですが、色々な提案ができるくらいになりました。子供達には、まちというのはいろんな人が住んでいる、自分たちだけじゃないということを分かって欲しい。それから、民主的な物事の進め方、みんなで決めていくことが難しいということと、難しいけれど目的を一つにしないと結果が出ないということに気づいてもらいたいと思っています。色々な人や場所と関わることによって、子供たちがその場所への愛着とか、地域を好きになるということの一步になるのではないかなと思いながら活動しています。

上野 ありがとうございます。討論者の皆さんから一通りお話をいただきました。キーワードとして、ネットワーク、コミュニティー、行政と市民の協働、わかりやすいまちづくり、縦割りの横繋ぎ、都市部と中山間部との調和、次世代をどうするか、まちづくりと教育が出てきました。大和田さん、学生がユニバーサルデザインの研修を受けたことが新聞に出ていましたが、あれはまちづくりセンターが呼びかけているのですか。

大和田 呼びかけたというか、センターとは色々な関わりを持ちながら、子供たちが4月から勉強をしています。その中間発表で、子供たちがまちを点検して、その改善点を発表するというイベントです。施設の関係者、行政、市民など、色々な関係者に集まっていただき、子供たちの発表を聞いてもらいました。それに対して、手抜きなしで、良いものは良い、できるものはできる、できないものはできない、お金は幾らかかるなど、きちんと大人に対する答えと同じように対応してもらおうという企画をしました。

上野 発言の中に、行政の縦割りを打破して市民と横に繋ごうという意見がありました。それほど縦割ではありません、行政はこんなふうを考えて進めています、というようなご意見があればどうぞ。

水谷 意見というほどではなく、若干言い訳じみた報告になりますが、以前から縦割りとよく言われていますが、我々なりに努力はしてきたということのご紹介をさせていただきます。国土交通省は昨年1月に、旧建設省、運輸省、国土庁、北海道開発庁の4省庁連合という形で発足しました。そして、4省庁が連合することの利益や良さをアピールするために、少なくとも国土交通

省の中では横のつながりを今まで以上に強化しよう取り組んでいます。他省庁との関係においても、それぞれの省庁が色々な形で連携施策に取り組んでおり、少しずつ横のつながりが持てるようになっていきます。

上野 役所の中で縦割り打破をやっているんですね。成果を期待しています。
ここから会場の皆さんにも参加していただくために、まんなかビジョンについて、事務局からご説明をいただいた後、また討論者の皆さんにご発言をいただきます。

司会 お手元の「まんなかビジョン」のパンフレットについて、見方も含めて説明させていただきます。まず、表紙ですが、中部地方は日本の真ん中にあり、いわば日の丸弁当の梅干みたいな地区だと思います。21世紀をわいわい語りながらおいしく弁当を食べるには、梅干一つでお弁当を食べるより、皆様のご意見を入れて、にぎわいのある幕の内弁当に変えたいと思います。

1ページでは、ビジョンの見方を説明しています。まず、1番には、中部の目指すべき方向として、7つの大きな目標を掲げました。2番目は、1の目標の解説です。3番は、1の目標を思い浮かべるために、現在の状況や理想とするイメージを表現しています。4番目は、目標を実現しなければならない理由を、現状と図表で示しています。5番目は、アウトカム目標を示しています。従来までは道路を何キロ作るとか川を何メートル整備しますという、いわゆるアウトプットのことを伝えていましたが、これからは作る目標ではなく、整備した結果どのような効果や成果が現われるかという、サービス水準に視点を置いたアウトカム目標を示しました。6番目は、アウトカム指標として、5番目の目標がどれくらい達成できたか、行政を評価する上で、フォローアップするときの数値や状況の変化の一例を示しています。7番目は、私どもが目標としている目標に対して、皆様に考えていただくための行動や方針を示しています。

は、「モノづくり産業の国際競争力の強化」です。日本の国際競争力が低下していると言われています。自動車産業等、中部はモノづくりの優位性を確保していますが、これからも中部が日本のモノづくりの中心であり続けるために目標に掲げました。

は、「世界都市を目指した名古屋の魅力向上と拠点都市のアップグレード」です。地域の都市の活気を生み出すことによって人や情報や物が集まり、それによって近郊地域全体の利益が上がると考えます。浜松市は静岡県西部地域の拠点都市であり、静岡西部地域の発展のためには、この目標も重要な方向だと考えます。

番目は、「東海環状都市圏・環伊勢湾広域交流圏などの形成による新たな交流の拡大」です。私達の日々の活動は、交流によって成り立っています。通勤、通学、買物やレジャーなど、すべてが交流であると思います。しかし、これらの交流だけではなく、環状都市圏の整備をすることで新たな交流を生み出そうという目標を掲げました。

番目は、「日本のまんなかである優位性を活かし、国土の東西・南北軸の再生や交流拠点整備による国内外の交流の推進」です。先ほどは日常的な交流でしたが、今度は内外ということで、もう少し広い範囲の交流を目指しています。東西の大動脈である東名高速も動脈硬化を起こしており、健全な状態に保つのが大変になってきています。東西の経済活動を保全し、有効に活用することができるように、東西軸の活性化を考えています。

番目は、「中部の豊かな自然環境、歴史、文化などを活かした地域づくり、観光振興」です。中部は、自然や文化・歴史が豊富です。これらの資源を守り、また育てることが、地域の発展を目指すうえで必要だと考えました。

番目は、「誰もが生き生きとして暮らせる豊かでゆったりとした生活環境の実現」です。これは、私達の生活の中で最も基本的な目標だと思います。少子高齢化が着実に進む中、豊かな生活環境が重要ですが、まだまだ豊かではないということで目標に掲げました。

最後に 番目は、「東海地震をはじめとした災害に強い安全・安心な地域づくり」です。日本の国土は災害に対して非常に脆弱です。さらに中部地方は、東海地震などの大規模な地震が想定されるなど、自然災害の危機にさらされています。尊い生命や財産を守るためには、早急に備えを充実させる必要があります。これらの目標には、まだ不足しているものや間違った部分等もあるかと思います。広く皆さんからの意見を聞きながら、より多くの人が納得できるビジョンにしたいと思いますので、皆様からの活発なご意見をいただきたく思います。以上です。

上野 ありがとうございました。それでは今、1番から7番までのビジョンの説明がありました。その中で中部地域全体、あるいは静岡県西部地区の発展のために重要だと思われる目標を、それぞれ1つだけ記入してください。この場で集計して、後ほど発表します。その結果を踏まえて、またご意見やご質問をいただくことになるかと思っています。それでは、集計をしている間、討論者の発言を頂きたいと思います。今度は、まんなかビジョンの説明を踏まえて、ご意見、あるいはビジョンに対する注文、提案をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

山口 浜松に住んでいると、中部圏に住んでいるという意識が大変弱いです。なぜかと言うと、まず交通網が中部圏として計画されていません。私達、豊橋に行くと、そこから先はどうしていいかわからない。それから、名古屋のテレビ局の放送を十分に見ることができない。情報と交通というアクセスがすべて遮断されているので、中部圏に住んでいる意識がしないということです。真ん中と言われますが、私達が真ん中と考えるのは、たとえば情報の真ん中は東京ですし、文化や伝統は京都です。NPOは、関西が結構盛です。日本は狭いので、地理的な真ん中という意識の必然性が消えている。

この7つの目標によって、中部圏が地域ブランドとして、どのようなイメージ、地域像を作っていくのか。地域圏全体を視野に入れて、ブランド化の作業を進めることのできる行政単位は、国土交通省しかないと思います。まちづくりビジョンの7つの目標は、文化や情報や歴史など、標準的だと思います。そういう知的なもの、楽しい快適なものについて、この上にかぶせる屋根か何かがないと中部のブランドを作ることは難しいのではないかと思います。

NPOの全国交流会のとき、アサヒビールの方のお話がありました。アサヒビールは企業としてのブランドが無いが、ソニーは企業としてのブランドがある。それは企業文化としてあるということでした。たとえば、ニナリッチのネクタイなどは、ほとんど山梨県の甲府界隈で作っているらしいのですが、甲府で生産されたと言うとたんに売れなくなる。なぜなら甲府には文化が集積しているというブランドイメージが無いからだ、という話をされました。教育面では、名古屋大学や豊橋技術科学大学の名前が全く出てきません。それから、国連の地域開発センターもあります。国土交通省なので、新しく作る色々なものを書いてありますが、中部の既存の知的集積をどうするかについては全然見えません。既存の中部圏の資産をしっかりと分析して、ブランドイメージを作るように再編する試みがなければ、この7つの目標は生きないのではないかと、交流に繋がらないのではないかと危惧します。

NGOの会議に出るために、去年の夏にバンクーバーに行ったとき、公共事業も含めて大変美しい町なので感激しました。それで、これは何か秘密があるに違いないと思い、バンクーバーの

市役所に行って、何でこの町がこんなに美しいか知りたいと申し上げたら、対応してくださった方が文化政策芸術局みたいな所でした。そこは、環状道路がバンクーバーの景色に調和するためにはどうしたら良いか、どうしたらもっと芸術的になるかなど、ハードの芸術性とソフトの芸術性を統合する縦割りの機関を統合する組織でした。都市計画と文化政策が一致したようなものかもしれませんが。そこが全体の縦割りを束ねて、都市のブランドを作成するところで非常に大きな力を発揮していました。私は、新しい何かを作るのではなく、既にある資産を再編成してブランド化するという発想に立たなければいけない、そういう仕組みが必要であると思いました。

上野 ありがとうございます。7つの目標をまとめて一つの中部というブランドにした場合、どんなブランドをお作りになるか、国土交通省では何かイメージがありますか。

金森 今は「地球は一つ」という考え方であり、「日本だ」「浜松だ」ということは全く必要のない時代に入ったと思います。浜松には、すばらしい港があり、空港ができ、緑の山があり、湖があり、こんなすばらしい所は世界にもありません。浜松には、今2万人以上のブラジル人が仕事をしています。この後、中国からも5万人くらいの人達を受け入れることになると思います。また、浜松ホトニクスがノーベル賞の縁の下で力持ちになっています。浜松には、自然だけでなく技術開発面など、全ての要素が整っています。全国的に見てもこんなに良い所は無い。そういう自覚をしっかりとって、若い人達が一つの目標に進めば良くなると思います。ビジョンの中の真ん中と言うのは、私は浜松だと言いたいところです。

上野 アンケートの調査結果が出ました。中部地域全体にとって一番重要だと考えられた目標は、
の「日本のまんなかである優位性を活かし、国土の東西・南北軸の再生や交流拠点整備による国内外交流の推進」で22票でした。二番目が、
の「モノづくりなど産業の国際競争力の強化」。三番目が、
の「中部の豊かな自然環境、歴史、文化などを活かした地域づくり、観光振興」。四番目が「東海地震をはじめとした災害に強い安全・安心な地域づくり」でした。

一方、静岡県西部地域にとって重要なものは、一番多かったのが、
の「誰もが生き生きとして暮らせる豊かでゆったりとした生活環境の実現」。二番目が、「モノづくりなど産業の国際競争力の強化」、三番目が、「東海地震をはじめとした災害に強い安全・安心な地域づくり」でした。この3つが特別に多く、後は、それぞれ4票、1票です。

一番重要視されなかった目標は、両地域とも
の「世界都市を目指した名古屋と拠点都市の魅力向上」でした。

従って、今日会場の皆さんの西部地域に対する目標は、
と と の3項目に集中していることが分かりました。そして、中部地域全体については、
の「国土軸を活かして」と
の「国際競争力」という結果になりました。

それでは、この結果を踏まえてご発言をいただきたいと思います。

山内 そもそも、物理的に真ん中と言うだけで、どういう独自性を持つべきかを考える必要があります。先ほどのブランドの話と通じる部分もあり、また、グローバルという話もありましたが、真ん中のメリットというものが無くなってきている中で、どういう部分で真ん中を特化していくかを考えるべきだと思います。一つには、交流があると思います。自然との触れ合いを求める場合に、来やすいということはあると思います。しかし、どうもまんなかビジョンは、名古屋中心

の考え方で書かれていると感じる部分があります。そして、全国を管理するエリアとして、中部、四国、九州などを見ているのではないか。いわば、東京から見た支店経済で言うところの名古屋支店経済というような感じを受け、我々の生活圏ではないような感じがします。浜松はまだしも、静岡、沼津、静岡県全部というと、本当にこれで良いのかなと思います。静岡県を分断して道州制のような形で検討する、そういう議論にまで発展させないと、この問題は解決しないのではないかと思います。

つまり、惑星とか衛星のような関係ではなく、星座のような関係が必要ではないか。例えば、浜松地域も星座の一つの星であるというようなことを、もう少し分かりやすく書いてもらう方が良いでしょう。もちろん、岐阜も三重もそうでしょう。ただベタベタと星雲みたいな形ではなく、星座のようにキラッキラキラッと光るものを作り出していくためには、星座に位置する中部圏というものが必要であると思います。

それから、少子・高齢化について問題提起がなされている割には、アウトカム目標であるとかアウトカム指標の例の中に具体的に目標が立てられていないように思います。子育て支援などの面で、どの様な形でアウトカムしていくのかを考えるべきだと思います。

さらに、これは全部に言えることですが、施設を作るとかではなく、仕組みや担い手づくりのような、そういったソフト面をどの様に進めるかを記述して欲しいと思います。

また、この地域は、真ん中であるが故に他の影響を受けやすいと思います。だから、競争の中で危機感を持たなければいけない圏域として、この様な10年、20年先の目標を検討しているのだと思います。それ故に、担い手づくりの話をもっと少しビジョンの中に謳っていただきたい。しかし、これは行政が意図的に作ろうと思ってもその通りにはならない、時間のかかるものですから、じっくり醸成していくことが必要だと思います。

上野 ありがとうございます。

三宅 私は、まんなかビジョンの目標の中では、「中部の豊かな自然環境、歴史、文化などを活かした地域づくり、観光振興」が重要だと思っています。中部に位置する東海道は、古くから中部の発展を支えてきました。従って、地域の人々が、色々な地域資源つまり自然環境や歴史・文化というものを再認識し、活用しながら未来に繋げることを、地域づくりに結びつけることが非常に重要な課題であると考えました。

101人会では、東海道400年祭事業に関わらせていただきました。東海道400年祭事業は、エントリー制の事業になっており、地域の皆さんが地域の歴史を探りながら、おらが町の自慢づくりとか自慢できるものを、県内もしくは全国に発信するイベントです。私もこのイベントを通じて、地域資源を再認識し、それを活用するための地域づくり活動に関わる中で、地域への愛着や誇りが生まれてくるのを実感しました。先日、三島へ行きました。三島市は、湧水が豊富ということで水の都と言われています。その生涯学習センターに水の町を紹介する小さな紹介コーナーがあり、昭和30年代の町中を流れるげんぺい川で子供たちが遊んでいる写真の展示がありました。その寄書きには、環境の変化でどぶ川になったものを、市民、企業、行政が一体になって、かつての水遊びができるげんぺい川に蘇らせましたとありました。文化芸大の木村学長は、よく「振り返ればそこに未来がある」というお言葉を使われます。地域資源を再認識して、再生することから、温故知新、温故再生という取り組みが非常に重要になってくると感じています。今後も東海道400年祭事業や伊豆創造世紀のようなイベントを、協働型の実践事業としてどんどん

企画していただき、私達市民が関わっていくというようなことを進めて行きたいと思います。

また、このビジョンでは、担い手づくりという面において、アウトカム指標が重要視されるべきではないかと思います。人材育成の分野では、色々な勉強会への参加人数が、アウトプットとして数値目標にされたりします。しかし、参加した人達が、その後地域づくりでどんな活動を行ったかというような、そういう指標はまだ無いと思いますので、是非、担い手づくり、人づくりのアウトカム指標を考えていただきたいと思います。

上野 ありがとうございます。

見野 近年、外に出られないお年寄りが増えてきています。そこで、問題になっているのが寝たきりと痴呆です。痴呆は家族の平和のためにボケふり老人をしている、あるいは家族の都合で寝たふりをしていると告白したお年寄りもいます。それは在宅介護の困難さということもありますが、地域の中で孤立している家族、家庭という姿と一致していると思います。この会議では、コミュニティの問題が出ていますが、コミュニティの最も原点である隣近所の関係が全く薄れて来てしまった、というよりも無くなって来ています。

そういう中で、これからは人を再生するための仕組みの一つとして、地域再生の仕組みが欲しいと思います。人が生き生きと暮らす、安心して暮らすということは、そんなに難しいことではないと思います。生命活動を維持するために、衣食住を重点的にどうしたら良いのか。殆どの日本人が持つ不安要因には、老後の問題とか地震の問題など、色々あると思いますが、その中で最も簡単で難しいのが隣近所との関係づくり、地域再生だろうと思います。その場合に必要となるのが、人づくりです。人づくりは、行政が主導するものではなく、地域のひとり一人が自分の問題として始めるものです。

私の所では、通所事業というデイサービス事業を行っています。そこでは、民家を利用し、お年寄りのリクエストに応じた食事を出すなどの、普通の生活をする事で障害が軽くなります。それを見ると、人を元気にするという事はそんなに難しいことではない。経済も元気にするという事は、そんなに難しいことではないと思います。

これまでのような右肩上がりではなく、今の生活で満足するということをもう少し大事にしていけば良いと思っています。経済も地産地消、この地で取れたものをこの地で消費する、循環経済を大事にしていくことが、これからのまちづくりにはとても必要ではないかと思います。

上野 ありがとうございます。

長谷 私、建築の業界に居ながら、どんどん建物が建つのはちょっとまずいんじゃないかと内心思っています。そろそろ国民全体で、これからの日本をどうしていくんだという大きなビジョンで発想していかなければいけないと思っています。まんなかということについては、中心市街地活性化と同じような問題で、そこだけ見ていては全体から乖離したものになってしまうと、少し危機感を持っています。

例えば、循環型の落ち着いた社会にしようという前提なのか、まだまだ伸ばして行くのか、皆さんでよく話し合った上で、まだ伸ばして行くのであれば、これからは物を作るのではなく、価値を創造していくことが大事なのだと思います。これまでの社会の動きを見ても、価値が生まれたところに物がついてきているのではないかと思います。これから日本は、どんどん人口が減少

するので、数で勝負しても勝てるわけではない。このビジョンの「まんなか」は、価値を創造するための中心という発想であれば良いと思います。

上野 ありがとうございました。

川合 近年、山村と都市との交流事業などで、お年寄りや若者が森林の体験作業をすることが増えました。また、治山治水という言葉も多く聞かれるようになりました。しかし、そういう小手先の事業で、本当に山を守ることが出来るのか不安です。私の住む天竜は森林都市宣言の町です。しかし、道路から見る山はきれいな緑かもしれませんが、山の木が泣いています、声を立てて泣いています。それが分かるでしょうか。

戦後、拡大林業のもと山に木を植えました。しかし、今その木を切ってもお金になりません。むしろ、木を切るとお金がかかるという実態の中で、山が守れないのです。私は、これから100年先、200年先、もっと先の日本の国土のことが考えられるのは、国土交通省の所管するところだと思います。どうしたら森林を守って行くことができるのか、先程から議論されている組織の横の繋がりという中で、そここのところをしっかりと考えていただきたい。

今は、100年かかって成長した杉ですらお金にならない時代になっています。輸入材がどんどん入ってくるために、国産の材木がまったく売れないのです。国内の林業が採算のとれる状況にならなければ、山を守ることとはできません。これは、国を挙げて考えなければいけない問題だと思います。

上野 引き続き金森さんお願いします。

金森 浜松の産業界で注目しているのは、レーザーと光の技術です。これを何とかして浜松を中心に、世界の技術にまで高める必要があります。海外では、静岡県浜松と言っても知らない人がほとんどです。ところが、富士山とホンダ、ヤマハ、スズキといえば、あああそこかと、それくらい知名度が違います。世界的な知名度だけがブランドではありませんが、それも重要です。今、浜松は経済的に恵まれています、そんな長くは続かないだろうという見方が殆どです。だから、次が変わるべき開発を急がなければならないと思います。

それから、労働力の問題については、ブラジル、中国、インドなどの優秀なIT技術者を受け入れられるような制度に是非していただきたい。またこの地域には、名古屋を始めとする港もあるし、静大を始め医大、芸術文化大学などの大学もある。これらの社会基盤や優秀な人材をもっとうまく使うことを考える必要があります。今のうちならば、できると思います。何故なら、高齢者の方が多くの資産を保有している。この資産を、技術開発などへ投資していただくことが、まちづくりには一番有効だと思います。

上野 ありがとうございました。

大和田 このビジョンには基本スタンスがあり、その中に分野間の連携強化とか既存ストックの活用とかハード・ソフト施策の戦略的組み合わせとか、住民参加、環境共生というものがあります。ビジョンでは、7つの柱を大切にしていますが、ほとんどの方は基本スタンスの方に興味があるのだと思います。だから、唯一中部というエリアを所管している国土交通省が、基本スタン

スの方でどんな意思を示すかということが非常に大事なのではないかと思います。

それから、草の根のまちづくり活動は、施設を建てるとか区画整理ということではなく、ネットワークですごく広域的に広がっていると思います。だから、そういう分野を国が支援することが必要だと思います。支援や協働は、色々な人が、色々な形で進めた方が良いと思うので、国も自治体に任せるのではなく、ビジョンの基本スタンスの中に草の根まちづくり支援のような施策を加えれば、我々にとって身近なものになると思います。

上野 ありがとうございます。会場の方から、ご発言があればお伺いしたいと思います。

聴講者 上海にこちらの繊維業界がショールームをオープンさせ、その名前が「富士山」であるということを聞きました。確かにブランド名としては富士山の方が通じるのですが、富士山よりもっとこちらの地域を発信できるような名前が付けられなかったのかなと思います。

上野 ありがとうございます。

金森 先程の上海のお話ですが、浜松の繊維業界の方は、よく考えていらっしゃると思いました。上海には日本人がたくさん居ます。まずその人達に浜松の繊維製品を買ってもらうのだそうです。そうすると中国の人が見て、やっぱり日本のものは良いと思うということだそうです。

上野 ありがとうございます。県の方からご感想、ご意見があればどうぞ。

木村 県では、昨年度から県全体のマスタープランを作成しており、その過程でも住民の方から意見を聞いています。そして、まちづくりの担い手づくりが必要ではないかというご意見も多々ありました。それを踏まえて、文化芸術大学と一緒にまちづくりリーダー養成事業を進めています。また、都市計画マスタープランの作成過程でも、まちづくりのリーダーから意見を聞きながら作業を進めており、やっと県も住民との協働作業に道を開いてきたという状況です。

上野 ありがとうございます。私の感想を言わせていただいて終わりにしたいと思います。

今日は、様々な角度から討論者の皆さんにご意見をいただきました。全体を通していくつかのキーワードが出されました。1 つ目は、地域資源、文化資源を生かすことが非常に重要であるということ。2 つ目は、まちづくりは人づくりであるということ。子供の教育問題も含めて、教育に留まらず様々な形で担い手の問題が重要であること。3 番目は、単にモノづくりとか地域の活性化ではなく、それを踏まえた価値づくりが重要であるということ。森林資源の重要性、国土の重要性を含めて、私達が国土や森に託す価値が重要であると思います。地域づくりも価値づくりであると思います。それから、私達の暮らしの中で守らなければいけない大事なものがあります。安全・安心と簡単に言ってしまいましたが、東海地震などを前提にすれば、命がかかっています。暮らしづくり、人づくりなどの中にある、私達の大事なものは何かということを見つめ直して、そこから地域づくりを考えてみる必要があると思います。

以上で私の司会を終わらせていただきます。ありがとうございます。

司会 上野先生どうもありがとうございました。

それでは、ビジョン討論会の閉会の挨拶を主催者を代表して、中部運輸局の武田企画課長よりお願いします。

武田 本日は、各パネリストの方々から色々なキーワード、それから宿題をいただきました。特に、私どもがまちづくりを考えるときに、人づくりとか価値の創造とか、国土交通省の中で議論しているだけでは出てこないお話をずいぶん伺わせていただいたと思います。

その辺りをどうビジョンに反映させるか、考えてまいります。また、国土交通省という枠だけではダメだということを非常に認識しましたので、これからさらに検討を深めていきたいと思います。

また、今日のご議論の内容は、ホームページや広報紙を通して公表することで広く共有していきたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

司会 これをもちましてビジョン討論会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

以上